〈資料紹介〉倉敷市所蔵「薄田泣菫関連資料」
与謝野晶子自筆歌稿「秋の薔薇」

加藤　美奈子

はじめに――倉敷市所蔵「薄田泣菫関連資料」について

平成二二年九月に、就実大学吉備地方文化研究所事業の一環として、倉敷市所蔵「薄田泣菫関連資料」（以下、「関連資料」）の調査・撮影を実施した（拙稿「倉敷市所蔵「薄田泣菫関連資料」調査経過報告」（「吉備地方文化研究」第二一号（就実大学吉備地方文化研究所　二〇一一年）掲載予定）。同稿では、泣菫の代表的な新体詩「ああ大和にしあらましかば」自筆原稿を、詩集『白羊宮』（金尾文淵堂明治三九年）と対照する形で掲載した。

今回、吉備地方文化研究所による調査・撮影の対象となったのは、二〇〇四年に「野田苑子家」から倉敷市に寄贈された資料である。

本稿では、「関連資料」の内、与謝野晶子の「秋の薔薇」と題された自筆歌稿一枚について、図版を掲載・翻刻し、初出・所収歌集等について若干の解説を加えた。この図版については、倉敷市（担当部署・文化振興課）の許諾を得て掲載している。

泣菫長女のご子息・満谷昭夫氏による、『泣菫残照―薄田泣菫関連資料を中心に―』（創元社　二〇〇三年）に、野田家「関連資料」の概容が示されている。「2．友人の原稿（『小天地』や毎日新聞に掲載したものか？）」として、「・与謝野晶子――「子供のこと」「秋のバラ」「紫影抄」「萱の葉」。」（同書一九七頁）と示されている。この「秋のバラ」が今回の資料である。「子供のこと」は原稿用紙二枚の随筆、「紫影抄」・「萱の葉」はそれぞれ原稿用紙五枚・四枚の歌稿で、

今回の調査・撮影で「関連資料」に確認することが出来た。稿を改めて紹介したい。

一　与謝野晶子自筆歌稿「秋の薔薇」概容・解題

「関連資料」の歌稿「秋の薔薇」は、原稿用紙一枚、縦約二六cm×横約三六cmの洋紙、「B4」サイズに相当し、青罫の四〇〇字詰原稿用紙の様式で、「十ノ二十　松屋製」と左下欄外に印刷されている。

黒インクのペン書きで、欄外に「秋の薔薇　与謝野晶子」とある。調査時、この原稿と重ねられており、便宜上この「秋の薔薇」と目録カードを同じくした残り二枚の歌稿の欄外にも「与謝野晶子」と署名されている。これら原稿用紙三枚の歌稿はいずれも、一マスに一文字ずつ記入、一首を二行に収め、一枚につき一〇首の短歌が総ルビで書かれている。

二枚目の歌稿は、「君と行く四谷見附の土手の草尺ほどとなり雨になびく日」など、主として『夏より秋へ』（金尾文淵堂　大正三年）所収の短歌が見出されるが、初出紙・誌については詳らかではない。なお、同歌は、歌集では五句が「小糠雨ふる」となっており（『夏より秋へ』402）、異同が見られる点でも興味深い。

三枚目の歌稿は、大正二年七月二〇日付で「大阪毎日新聞」に「湯あかりの後」と題されて掲載されたが、初出が不明の作品も数首含まれている。未発表歌を含む可能性のあるこの原稿用紙二枚の歌稿については、改めて考察を加えたい。

今回掲載した「秋の薔薇」という題は、歌稿の第一首「秋の薔薇こひしと云ひて一つ摘み詫しとかこち一つ摘むかな」の初句による。

作品は、「大阪毎日新聞」大正四年九月二六日に「秋の薔薇」と題して掲載された。後に、歌集『朱葉集』（金尾文淵堂　大正五年）に、掲載一〇首の内から七首を収めている。

二　与謝野晶子自筆歌稿「秋の薔薇」図版と翻刻・掲載紙

次頁に、与謝野晶子自筆歌稿「秋の薔薇」**【図版1】**と翻刻（翻刻中の□は文字の修正箇所を示している）、参考資料として掲載紙「大阪毎日新聞」（大正四年九月二六日付）「秋の薔薇」**【図版2】**を掲げた。

なお、図版は、前述の調査で撮影された画像データの周囲を削除し、筆跡を明確にするため、明度等に若干の加工を加えた。

「大阪毎日新聞」紙面は、国立国会図書館所蔵データの複写によった。

【図版1】与謝野晶子自筆歌稿「秋の薔薇」（次頁）

秋の景色

秋の景色をうしと云ひて一つ橋を詠しとかこ
ちつつ橋をわたる
わかれ鶴へ白雲かすして飛ひ雲りぬ秋を似た
れ海鼠とも
ひていろの秋のみそらを行く雁絵めてたく書し
わかめのこと
秋の紅葉紅葉の如くなる梅より落つ白梅の
名なる
ちかるる参詣ゆかりにあれしおのれの髪の
事さらり

秋の景色

われのみは秋の紅より白ひ嗅く涙をちかしう
ちょうへつつ
ちれ一雨を石試しつと寒へどもあやな
りあきがたきかな
たちそくゆすめて見るこほろぎの鳴と思い
ぬ夜中の月に
寒ひもつや紫苑一もと大そうの雲よりちかく
立ちもちひきし
この二人秋にみそけぬ華奢をする人とかくに
白上面する

与謝野晶子　自筆歌稿「秋の薔薇」翻刻

〔欄外〕秋の薔薇　　与謝野晶子

秋の薔薇こひしと云ひて一つ摘み詫しとかこ
ち一つ摘むかな
わが船へ白刃かざして飛び乗りぬ秋こそ似た
れ海賊どもに
水いろの秋のみそらを行く蜻蛉めでたく清し
たわやめのごと
秋の風厚織物のごとくなる梢より落つ白楊の
葉は
切なかる愛欲おぼゆ手にふれしおのれの髪の
柔さより
われのみは秋の風より匂ひ嗅ぐ涙をながしう
ちふるへつつ
ただ一語□君試しつと思へどもまことあやま
りわきがたきかな
たてもなくゆすれて光るこほろぎの声と思ひ
ぬ夜中の月に
思ひ出づや紫苑一もと大ぞらの雲よりたかく
立ちもなびきし
この二人秋にふさはぬ華奢をする人と如くに
匂ふ面する

【図版2】「大阪毎日新聞」（大正四年九月二六日付）「秋の薔薇」

秋の薔薇

與謝野晶子

秋の薔薇こひしと言つて一つ摘み詫
しとかこち一つ摘むかな
わが船へ白刃かざして飛び乗りぬ秋
こそ似たれ海賊どもに
水色の秋のみそらを行く蜻蛉めでた
く清したわや女の如
秋の風厚織物のごとくなる梢より落
つ白楊の葉は
切なかる愛欲おぼゆ手に觸れしおの
れの髪の柔かきより
吾のみは秋の風より匂ひ嗅ぐ涙を流
しうちふるへつゝ
唯一語君試しつと思へどもまことあ
やまりわきがたきかな
たてもなくゆすれて光るこほろぎの
聲と思ひぬ夜中の月に
思ひいづや紫苑一もと大ぞらの雲よ
り高く立ちもなびきし
この二人秋にふさはぬ華奢をする人
と如くに匂ふ面する

三　与謝野晶子自筆歌稿「秋の薔薇」一〇首　解説

歌稿「秋の薔薇」一〇首の内、七首を収める『朱葉集』は、大正五年一月、晶子三八歳の歌集で、五三二首を収録している。「装幀は津田青楓、挿画は中沢弘光か」と解説されている（平子恭子編著『年表作家読本　与謝野晶子』（河出書房新社　一九九五年）九九頁）。

同じ大正五年には、小説『明るみへ』、評釈書『短歌三百講』、評論集『人及び女として』、歌集『晶子新集』、『新訳紫式部日記　新訳和泉式部日記』、『新訳徒然草』を刊行している。明治末年五月より一〇月までの渡欧を経て、短歌のみならず、幅広い執筆活動により、多くの著作を刊行した時期である（『年表作家読本　与謝野晶子』（前掲）九九―一〇一頁）。

以下、自筆歌稿一〇首について、掲載紙・歌集『朱葉集』掲載歌と比較してみたい（底本は、『定本與謝野晶子全集』一―二〇巻（講談社　昭和五四―五六年）によった（以下、『全集』）。漢字の旧字体は適宜新字体に改めた。引用の傍線は引用者による。以下同断）。

○―『朱葉集』所収歌　・―歌集未収録歌

ゴシック体で、自筆歌稿「秋の薔薇」からの翻刻を示した。

〔初出〕―「秋の薔薇」（「大阪毎日新聞」大正四年九月二六日付）

校異(1)～(5)―作品の初句～五句を示す。

〔歌集〕―『朱葉集』（前掲）

〔拾遺（大正四年）〕―『朱葉葉』所収歌以外。「明治四十五年・大正元年～六年（拾遺）」の内、「大正四年」の「拾遺」によった。「拾遺」は前掲「大阪毎日新聞」を底本としているため、本文は省略した。歌番号は、〔歌集〕・〔拾遺（大正四年）〕ともに『全集』によった。

○秋の薔薇こひしと云ひて一つ摘み詫しとかこち一つ摘むかな

〔初出〕(2)こひしと言つて

〔歌集〕139秋の薔薇さびしと云ひて一つ摘み恋しとかこち一つ摘むかな

原稿と初出で若干の差異がある。歌集では、「こひし」を「さびし」、「詫し」を「恋し」としている。この変更により、「恋しとかこち」という相反する思いが強調されている。

・わが船へ白刃かざして飛び乗りぬ秋こそ似たれ海賊どもに

〔初出〕(1)わが船へ〔拾遺（大正四年）〕191

初句のルビ以外、原稿と初出に異同はない。「秋」―「白」の連想が「白刃」を詠ませたか。季節の来訪を「海賊」の比喩で詠んでいる。「海賊」は、西洋的なそれよりも、『源氏物語』「玉鬘」の「海賊の舟にやあらん、小さき舟の飛ぶやうにて来る」、「海賊のひたぶるならむよりも、かの恐ろしき人の追ひ来るにやと思ふにせむ方なし」（『新編日本古典文学全集22　源氏物語3』（小学館　一九九六年）一〇〇頁）とある一節を思わせる。「白刃」の用例は、「しら刃もて

われにせまりしけはしさの消えゆく人をあはれと思ふ」（『佐保姫』（明治四二年）295）など、印象的な作品の用例が散見される。

○水いろの秋のみそらを行く蜻蛉めでたく清したわやめのごと

〔初出〕(1)水色の(5)たわや女の如

〔歌集〕134水いろの秋のみそらを行くとんぼめでたく清したをやめのごと

表記の他、「たわやめ」と「たをやめ」の異同がある。晶子の他の歌でも「たわやめ」「たをやめ」両方の用例が確認出来る。初句「水色」と詠んでいる歌は、『全集』索引だけでも、五〇首近くが見出される。「水色の秋のあけぼの大海の真白く塗れる船に有らまし」（『青海波』（明治四五年）207）など、類似した表現の歌も見られる。

○秋の風厚織物のごとくなる梢より落つ白楊の葉は

〔初出〕(5)白楊の葉は

〔歌集〕135秋風や厚織物のごとくなる梢より落つ白楊の葉は

ルビと初句に異同がある。「白楊」は、「植物「やまならし（山鳴）」の慣用漢名」（『日本国語大辞典　第二版』（小学館）、「やまならし」は、「ヤナギ科の落葉高木。（中略）各地の山地に生える。高さ五メートル内外になる。葉は長柄をもち広楕円状菱形、縁に細鋸葉（きょし）があり、裏は灰白色」と説明される（同）。晶子が詠んだ歌として、「海に似る森をはなれて白楊のまばらに立てる秋の野に出づ」（『夏より秋へ』（前掲）687）、「白楊のめでたきことをはてもなく思へる時の秋の風かな」（『夏より秋へ』（前掲）688）が挙げられる。いずれも、「秋」「秋の風」と配合され、ここにも「秋」―「白」の色彩の連想があることを思わせる。「厚織物」は、『日本国語大辞典第二版』（前掲）「あつおり（厚織）」の項に、「布を厚地に織ること。また、その織物」とある。用例に、有島武郎『星座』（一九二二年）「厚織りの紺の暖簾を潜った」が挙げられている。

○切なかる愛欲おぼゆ手にふれしおのれの髪の柔さより

〔初出〕(3)手に触れし(5)柔かきより

〔歌集〕142せつなかる愛欲おぼゆ手に触れしおのれの髪のやはらかさより

五句、原稿と初出に異同がある。「おのれの髪の柔さ」を詠んだ「髪五尺ときなば水にやはらかき少女ごころは秘めて放たじ」（『みだれ髪』（明治三四年）3）はよく知られている。「愛欲」という漢語は、「相人よ愛欲せちに面痩せて美くしき子に善きことを言へ」（『舞姫』（明治三九年）104）で印象に残る語である。初期の秘められた「少女ごころ」と対置する時、この時期の孤愁を思わせる自愛の姿が哀切である。

○われのみは秋の風より匂ひ嗅ぐ涙をながしうちふるへつつ

〔初出〕(1)吾のみは(4)涙を流し(5)うちふるへつゝ

〔歌集〕133われのみは秋の風より匂嗅ぐ涙をながしうちふるへつつ

○ただ一語□君試しつと思へどもまことあやまりわきがたきかな

〔初出〕(1)唯一語

〔歌集〕141ただ一語君ためしつと思へるもまこと過りわきがたし今

歌集五句の異同が興味深い。「わきがたきかな」という詠嘆に、「今」という時間の認識が加わっている。大正四年五月頃より、寛が晶子に「懺悔」を始める(『年表作家読本　与謝野晶子』(前掲)九九頁)。『朱葉集』には、寛の「懺悔」が晶子の心境に波紋を投げかけた痕跡が伺われる。「懺悔して心にものの消え去ると思ふ幼き人にもあるかな」(『朱葉集』294)「われなどが懺悔のまへにあることも定めなき世の一つとや思ふ」(同300)などの一連の歌が大正四年五、六月を初出として収められている。この「ただ一語」も、「君」が自分を試しただけだと思いながら、どこまでが真実か分からない、という疑念に苦しめられている。前掲の「涙をながしうちふるへつつ」という悲哀、「われのみ」という孤独感もこれに起因するかと思われる。

・たてもなくゆすれて光るこほろぎの声と思ひぬ夜中の月に

〔初出〕同／〔拾遺(大正四年)〕192

聴覚における「こほろぎの声」を、「ゆすれて光る」と視覚で捉え、折からの月光と響き合う趣向で詠んでいる。

○思ひ出づや紫苑一もと大ぞらの雲よりたかく立ちもなびきし

〔初出〕(1)思ひいづや(4)雲より高く

〔歌集〕145思ひ出づや紫苑一もと大ぞらの雲より高く立ちし草むら

初句字余りだが、「思ひ出づや美濃のを山のひとつ松契しことはいつも忘れず」(『新日本古典文学大系　新古今和歌集』(岩波書店一九九二年)1408　伊勢)など、和歌にも用例が散見される。引用した伊勢の歌は、「ひとつ松」を詠んでいるが、「紫苑一もと」と風情が通う。「契しこと」を詠んだ伊勢の歌に対して、一首は「雲よりたかく」と孤高な姿の印象が深い。

・この二人秋にふさはぬ華奢をする人と如くに匂ふ面する

〔初出〕同／〔拾遺(大正四年)〕193

「華奢」は、「はなやかでおごりたかぶっていること。はでに暮らすこと。奢侈」(『日本国語大辞典　第二版』(前掲)の意で用いている。用例として、『日葡辞書』が挙げられ、「クワシャ」の意味として、「着物などを立派に、また華麗に、きらびやかに着こなす人」とある。晶子の歌に、「華奢に散る山の桂のもみぢかな日輪の粉のこぼるるやうに」(〔拾遺(昭和二年)〕12)があり、「華奢」は、この歌でも豪華で色彩豊かなことを表現している。「この二人」という初句は、「この二人初めてうしと云ふことをわがためにしり君がためしる」(〔拾遺(大正二年)〕136)などの例がある。

おわりに

以上、「薄田泣菫関連資料」の内、与謝野晶子自筆歌稿「秋の薔薇」を翻刻・紹介した。他の「関連資料」中の晶子自筆原稿についても、本論叢での公表を考えているが、全集未収録・未発表作品を含んでいる可能性が考えられ、調査の上、所蔵の倉敷市の方針に沿う形での公表としたい。

今回の歌稿は、泣菫が学芸部に所属した「大阪毎日新聞」紙上に一〇首まとめて掲載され、七首が『朱葉集』に、残り三首も、「拾遺」して『定本與謝野晶子全集』（前掲）に確認出来る作品である。

原稿と、掲載紙・歌集との間における表現・表記等の異同は、今回の晶子自筆歌稿の存在により明らかとなったものである。特に、歌集のみならず、原稿と「大阪毎日新聞」掲載歌との間にも、表記等の異同が見られたことが興味深い。

末筆ながら、「関連資料」を担当されている倉敷市文化振興課主任・秋山剛氏、および、長年に亘り『泣菫小伝』一―九（薄田泣菫顕彰会　平成一四―二二年）を刊行されるなど、泣菫生家のある倉敷市連島から精力的に泣菫顕彰事業に尽力、「関連資料」についても常日頃よりご助言頂いている「薄田泣菫顕彰会」事務局・三宅昭三氏に心より感謝申上げたい。